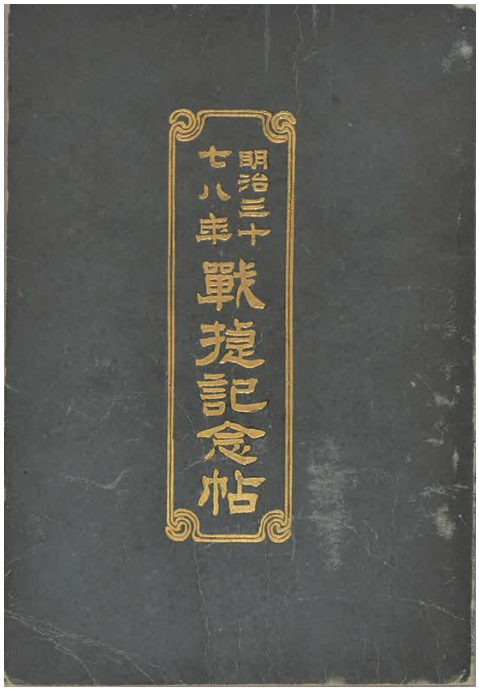
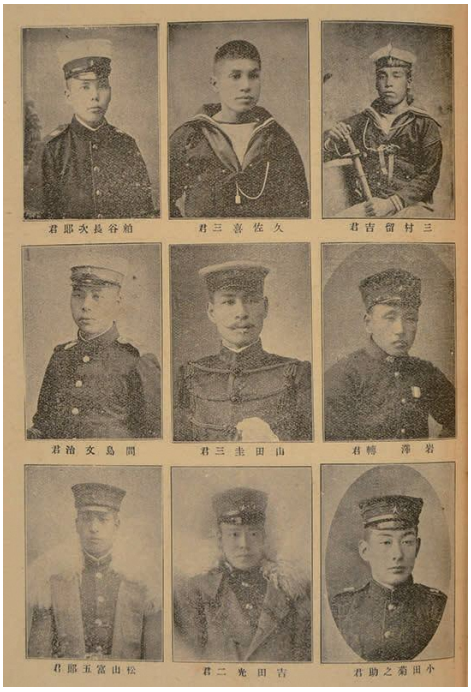
川越市立博物館

博物館だより

第84号





川越町と日露戦争

この写真は、「明治三十七八年戦捷記念帖」とタイトルが付けられた本です。明治37～38年（1904～05）の日露戦争において、川越町から出征した兵士がどのように関わったのか、戦役の履歴や、戦没者の名前・戦没した場所などが、総数169ページ（うち写真39ページ）にわたって詳細に書かれています。この資料は、昨年の8月23日に、川越市内にお住まいの方よりご寄贈いただきました。

その方の祖父の兄である吉田光二氏は、明治16年（1883）3月3日に生まれ、第7師団歩兵第26連隊第3中隊に所属し、明治38年3月10日中国の奉天北陵（現在中華人民共和国瀋陽）で戦死しました。この日は奉天会戦と呼ばれる日露戦争最大の戦いで、日露双方あわせて60万の兵力による大規模な戦闘が行われました。この戦いでかろうじて勝利を得た日本は、5月の日本海海戦を経てロシアと講和しました。

この本には、「川越町戦時一般ノ状況」として、この当時、川越町での軍馬や軍需品の購買、国庫債券応募、出征軍人家や遺族への扶助、愛国婦人会の事業など、銃後の様々な状況も記されています。その中で特筆されるのは、帰還した兵士たちがどのような戦役を経たのかを記した「履歴書」の部分で、その分量は本文の8割を超えています。

履歴書には212名（全て陸軍）もの兵士の戦歴が記されています。兵士はほとんどが20代で、中には明治17年（1884）生まれの満20才になったばかりの方も見られます。入隊してどこの港から戦地へ向かい、戦地での戦闘、帰国、召集解除など、こと細かく日付けが記されています。一方、戦死された14名は亡くなった日付けと場所だけで、たった4ページしか書かれていません。

この記念帖が発行されたのは明治40年で、日露戦争から数年が経過し、戦死者の記述もごくわずかなため、戦地からの帰還者を顕彰する目的で、この書が編さんされたものと思われます。戦争の記憶が日々に薄れゆくなかで、元兵士たちの労苦を記録にとどめたいとの思いがうかがえます。

（学芸担当　宮原一郎）

近世考古学への招待

― 江戸時代のやきものの見方・考え方 ―

写真１　川越市内出土の江戸時代の陶磁器

はじめに

日本人のやきもの好きは世界的にも有名です。陶磁器や茶道具などを取り上げた博物館・美術館の展覧会には長蛇の列ができていますし、川越市内で開かれる骨董市はいつも大勢の人たちで賑わっています。

今回の博物館だよりでは、こうしたやきものを見たり、使ったりという楽しみ方とは一味違った楽しみ方を提案したいと思います。それは、やきものから歴史について考えるという楽しみ方です。

川越市立博物館には、川越城跡や旧川越城下などから出土した陶磁器や民具としてご寄贈いただいた江戸時代の陶磁器が多数収蔵されています。こうした物言わぬ陶磁器から川越の歴史や当時の人々のくらしぶりについて聞き出すためには、見る側の私たちの問いかけ方が大切です。

本稿では、博物館収蔵の陶磁器からわかった事柄とともに、歴史資料としての陶磁器の見方・考え方についてもお伝えしたいと思います。

１　川越城下のやきもの

(1) 城下町の年代を探る

平成３年、一番街電線地中化工事に伴い、蔵造り資料館 (旧小山家住宅) の添屋（そえや）の地下が掘削されることになりました。これに伴い博物館では蔵造りの基礎工法調査のための立会調査を行いました。

調査によって添屋の地下は基盤となる関東ローム層 (赤土) までの深さが 2.8m もあり、その間に大規模な火事による焼土層が４面確認されました。つまり、川越城下は火事があるたびに大規模な整地を行い、その上に街並みが復興されていったのです。

さて、写真２に示した唐津焼（からつやき）の鉢のかけらは最古の焼土層のさらに下から出土しました。

内面にのびやかな筆致（ひっち）で野葡萄の文様を鉄絵で描いた後、灰釉（かいゆう）を施しています。底面には唐津焼の特徴である赤褐色の素地が見え、竹のように節立った高台が削り出されています。これらの特徴から、この唐津焼の鉢は 17 世紀前半の製品と考えられます。

この時代は松平信綱が藩主となり (在任期間：寛永 16 年・1639 ～正保４年・1647)、川越城の改修・川越城下の整備を進めていた時期に当たります。一番街の分厚い地層の堆積の下には江戸時代前期の城下町が埋もれていることが明らかとなりました。

写真２　灰釉鉄絵野葡萄文鉢　唐津　17 世紀前半

(2) 輸入陶磁器から幕末の国際化を知る

市内喜多町にある原澤家は「笹屋（ささや）」の屋号で知られる米穀問屋です。敷地内にあった穀蔵（こくぐら）が取り壊された際、博物館では建物の基礎構造を調査させていただきました。

この時の調査では明治時代に建てられた穀蔵の基礎の下から江戸時代の地下室が発見されました。地下室は平面形が長方形で、関東ローム層を掘り抜いて造られていました。使われなくなってからは大量の土砂で埋め戻されており、その中には大量の陶磁器が含まれていました。

これらの陶磁器には、江戸時代を通じて流通した有田焼の磁器に加えて、幕末になって新たに焼造（しょうぞう）が始まった美濃焼の磁器が混じっており、地下室が埋められたのは 19 世紀前半のことと考えられます。出土した陶磁器は、碗・皿・鉢などの食器類のほか、擂鉢（すりばち）・土鍋・焜炉（こんろ）などの調理具、灯明皿（とうみょうざら）・火鉢など照明・暖房具、植木鉢や泥面子（どろめんこ）などの玩具もあり、くらしの道具の全般に及びます。

中には写真３のような陶磁器もありました。

深い身の部分にハの字形に開いた高台が付き、持ち手の部分は破損していましたが、紅茶を飲む時に使われるティーカップと考えられます。コバルトブルーの顔料を用い銅版転写技法で外面には騎馬人物と欧風庭園が、裏面の縁の部分には花の模様が絵付けされていました。高台の裏には「A」のサインがあり、オランダからの輸入品と考えられます。

こうしてみると、江戸時代、ことに幕末という時代は、現代の私たちが考えるよりずっと国際的であったと言えるでしょう。

写真３　染付騎馬人物庭園図ティーカップ　オランダ　19 世紀

(3) 焼継ぎから町場の賑わいを考える

写真４　色絵蓮池双鶴文大皿　有田　19 世紀前半

写真４は、これまで紹介したものと異なり、市民の方からご寄贈いただいた有田焼の色絵皿です。

口径が 31㎝もある立派なもので、縁の部分に８ヶ所の切れ込みを入れ、花びらの形に作られています。内面中央に蓮池と２羽の鶴を描き、周囲を８つの窓に割って蟹・海老・魚を描いています。誰かこのお皿を落として割ってしまった人がいたようで、「焼継ぎ」を用いた修理が施されていました。

焼継ぎは鉛ガラスを使ってかけらを繋ぐ修理技法で、寛政２年 (1790) 頃から始まり、「このゆえに瀬戸物屋商い薄くなりしというほどなり。」(小川顕道『塵塚談』) と言われるほど普及しました。

欠けた器を直して使うというと、つましい印象を受けますが、焼継ぎ屋は天秤棒を担いで注文を取って廻ったため、焼継ぎされた陶磁器は村ではなく、家の密集した繁華な町場から多く出土しています。

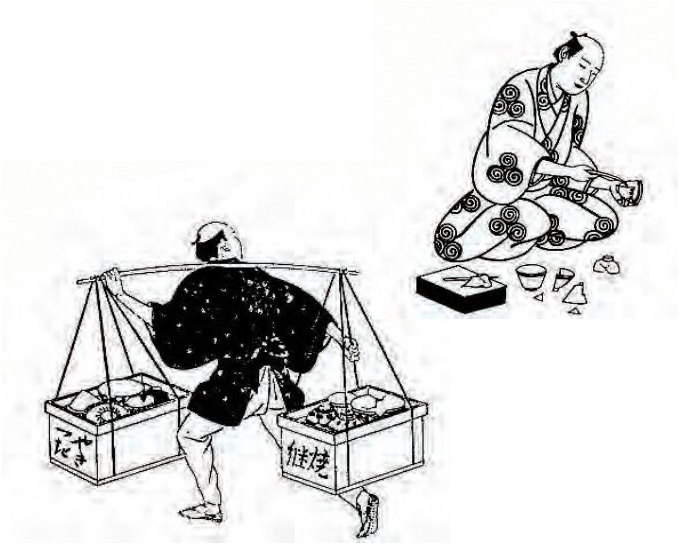


図１　焼継ぎ職人（左：『怪談模々夢字彙』　右：『略画職人尽』）

2　川越城内のやきもの

(1) 大量の茶碗と墨書

ご存じのように市立博物館は川越城跡内にあります。平成５年、博物館前の市営テニスコート跡地で発掘調査が行われました。現在の駐車場のあたりです。市立図書館所蔵の慶応３年 (1867)『川越城図』によれば、この場所は本丸と二ノ丸を隔てる内堀の一部に当たり、発掘調査でも幅 20m、深さ 5m の大規模な堀が発見されました。

二ノ丸側に当たる堀の北側からはスロープのついた大型の地下室が見つかり、中から大量の陶磁器が出土しました。これらは弘化３年 (1846) の火災で焼失した二ノ丸御殿で使われていたものと考えられます。これらの中で注目されるのは、同じ形、同じ大きさ、同じ模様のやきものが大量に出土したことです。その中には写真５のような茶碗もあります。

口径 9cm、高さ 5cm くらい、手の中にすっぽり収まってしまうくらいの可愛らしい信楽焼（しがらきやき）の茶碗です。正面にはおめでたい若杉（わかすぎ）の文様を鉄絵（てつえ）で描き、全体に灰釉を掛けています。これらは、当時一般的に飲まれていた煎じ茶の茶碗と考えられます。こうした小杉碗が何百という単位で出土しました。

太平の世であった江戸時代の川越城は藩政を司る官庁でもありました。この役所に詰める多くの家臣たちに供されるため、これら大量の小杉碗が備えられていたのだと考えられます。

小杉碗を裏返してみると写真６・７のように「廣」「徒士（かち）」などの文字が墨書きされています。お茶をお出しする場所や人を間違えないように書かれた文字なのかもしれません。

写真５　灰釉小杉碗　信楽　19 世紀前半

写真６　高台内墨書「廣」

写真７　高台内墨書「徒士」

(2) うつわの傷から使用法を考える

この時の発掘調査では、写真８のような有田焼の青磁のうつわもたくさん出土していました。これらも二ノ丸御殿で使われたものなのでしょう。やはり何百という数で出土しました。

口径 11㎝、高さ８㎝ほどの大きさで、青磁釉（せいじゆう）は深い緑色に美しく発色しています。このうつわは火容れといって、煙草を吸う時、キセルに火を付けるための火種を容れておくためのうつわです。

写真９は寄贈民具の煙草盆で、箱の中に火種を容れた火容れと吸殻を捨てるための竹製の灰吹きが組まれています。川越城城内にも、集まる人々をもてなすため、このような煙草盆がたくさん備えられていたのでしょう。

ここでひとつ気になるのは、青磁火容れ（せいじひい）の傷です。写真８のように強く叩かれたような傷が縁の部分に何カ所もつけられていました。これは一服した後の煙草の吸殻を捨てるため、キセルの雁首（がんくび）で叩いた時についた傷と考えられます。本来、火種を容れておくための火容れの中に吸い殻を捨てていたのです。城内の人々は意外と行儀が悪かったようです。

写真８　青磁火容れ
有田　19 世紀前半

写真９　煙草盆と煙管

(3) うつわのにおいから使用法を考える

川越城跡の発掘調査では写真 10 のような美濃焼の徳利も出土しました。

高さ 22㎝ほど。全体に淡い緑色の灰釉が掛けられています。これらは現在の岐阜県多治見市の高田地区周辺で焼かれていたことから「高田徳利」とも呼ばれています。灰釉徳利の出土点数も多く、発掘調査中はこんなにも多くのお酒が城内で呑まれていたのかとあきれていたものです。しかし、お酒以外のものも中に入れられていたことがわかりました。

全く割れていない完形の徳利のにおいを一本一本嗅いでいったところ、灯明油として使われていた菜種油の臭いが残っているものが見つかりました。城内に暮らす多くの人たちのために、照明として使われる灯油油こそ多量に必要だったのでしょう。

さて、菜種油の臭いが確認された徳利の中には「山麻（やまあさ）」という屋号が釘書きされたものがありました。一般的に屋号の刻まれた徳利は、酒屋さんがお酒を小売りする時にお得意さんに貸し出す「通い徳利」と考えられています。

試みに大正 5 年 (1916) の『川越商工人名録』を調べてみたところ、喜多町で塩・油・肥料などを商っていた綾部利右衛門商店の屋号が「山麻」であることがわかりました。喜多町の綾部家は江戸時代、川越藩の御用商人として活躍しました。

これらのことから、川越城の二の丸御殿で使われていた灰釉徳利のうちの何割かは、綾部家が城内に灯明油を納める時に使われたものと考えられます。

先入観だけでやきものの使われ方を考えてはいけないという好例です。

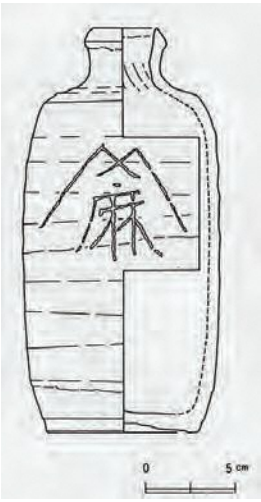


写真１０・図２　灰釉徳利　美濃　18 世紀後半

3　歴史資料としてのやきものの見方・考え方

これまで博物館で収蔵する出土資料・民具資料の江戸時代のやきものからどのような事がわかるのか見てきました。ここでは、やきものを歴史資料とするにはどんな見方が必要なのか振り返り、まとめとしたいと思います。

やきものの形の変化や特徴からは、そのやきものの作られた時代がわかります。発掘調査では、そのやきものが出土した土層・遺構の年代を知るものさしとなります。

ひとつの遺構から一括して出土した複数のやきものの組み合わせや数量からは、その家の生活様式を知ることができます。また、特徴的なやきものが含まれていることで、その家の豊かさもわかります。

やきものの傷やにおいからは、そのやきものが実際に何に使われたのかがわかります。川越城跡の徳利のように通常の使われ方と違う場合もあるので注意が必要です。

博物館などで展示されているやきものは美術品ばかりではありません。見方を変えることによってさまざまな歴史的な情報を引き出すことができます。お試しください。　　（学芸担当　岡田賢治）

【参考文献】

・川越市立博物館　1992 『一番街トランス埋設工事に伴う立会調査報告書 (1) 旧小山家住宅・元町公共用地』

・川越市立博物館　1993「川越城本丸跡第 4 次調査について」『博物館だより』第 10 号

・川越市立博物館　1994「においのタイム・カプセル」『博物館だより』第 10 号

・川越市立博物館　1998『近世陶磁への招待－陶磁器からみた江戸時代のくらし－』

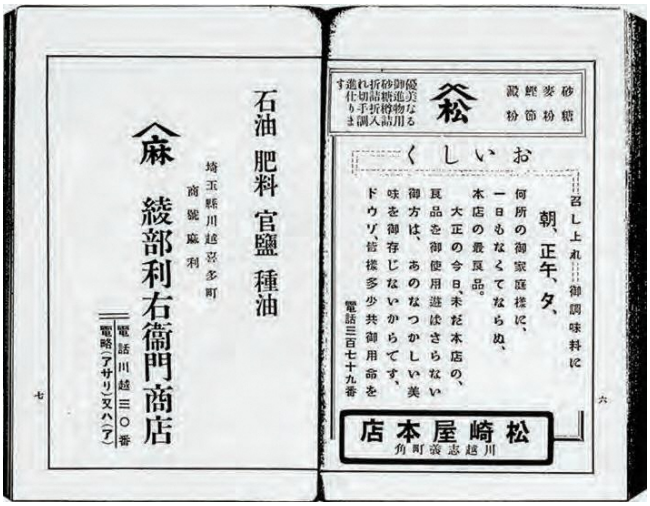


図３　『川越商工人名録』大正５年 (1916)

講座・教室等ご案内

当館では、博物館だよりで何度かご紹介いたしました「子ども体験教室」を、地域の社会教育の一環として定期的に行っています。子どもたちが楽しみながら歴史や文化の継承に関わる体験ができるよう企画していますが、参加者だけでなく多くの保護者の皆様からも好評をいただいています。

今回は、特に人気のある「まが玉をつくろう」をご紹介します。

◆子ども体験教室　～まが玉をつくろう～◆

まが玉（勾玉・曲玉）とは、古代の装身具の一種で祭祀（さいし）にも使用されたといわれます。コの字型に湾曲（わんきょく）し、牙や胎児の形、魂など起源には諸説があります。「埼玉県章（県のマーク）」を思い出してください。まが玉の形をしたものが16個描かれているのを「見たことがある！」という方がたくさんいらっしゃるのではないでしょうか。このような古代の物を自分で作ってみるという体験が、「まが玉をつくろう」です。今年度は４月２１日（土）に開催しました。

〈まが玉の作り方〉

※準備として、四角い滑石（かっせき）という種類の石にドリルで穴をあけておきます。

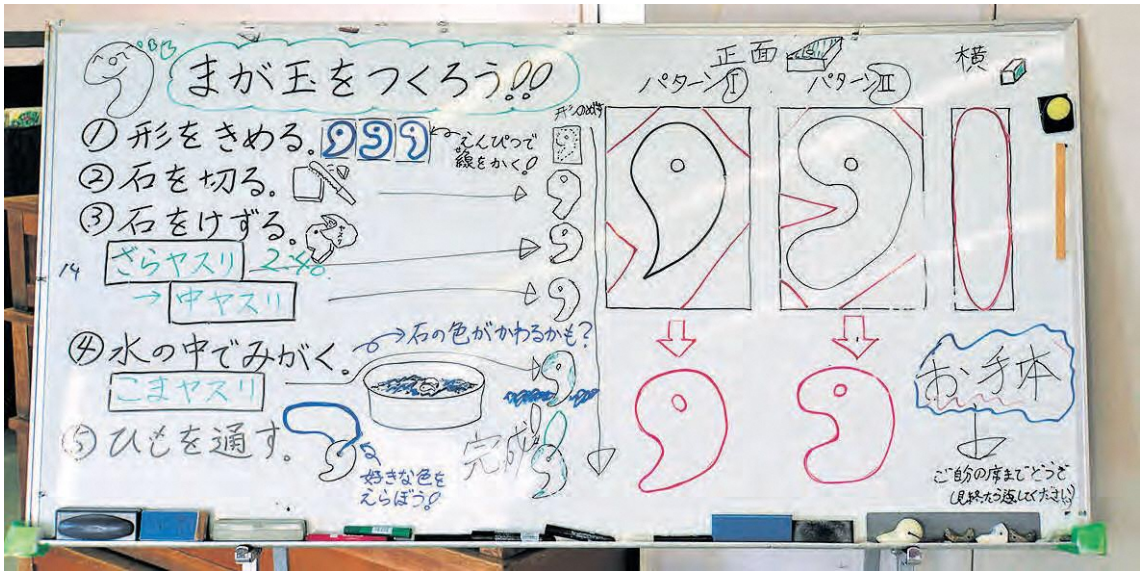


写真１　石の四隅を切ります

写真２　紙やすりで削ります

上の写真のような手順で、子どもたちは夢中で石を切ったり磨いたりしていました。付き添いの保護者の中には、子どもの切り落とした滑石のかけらを磨いて、小さなまが玉を作ってしまう方も見られました。

自分だけのまが玉を手にした子どもたちから、笑顔とともに「楽しかった！」「来年も来ます！」という感想が聞こえてきました。

（教育普及担当　土井和貴）

今回ご紹介した体験以外にも、たくさんの体験教室があります。ぜひ、ホームページや市の広報をチェックしてみてください。

Information

平成 30 年度の博物館行事です（12 月まで）

展覧会・講座・教室 etc

●‥一般向け事業　開催日・講　座　名
○‥子ども向け事業　開催日・内　容

8 月

7 月 14 日（土）～　第 28 回収蔵品展　**戦中・戦後の川越の歩み**

- ○1 日（水）夏休み特別企画 **探検！となりのまちの博物館**
- ○8 日（水）夏休み特別企画 **ミニ灯籠を作ろう**
- ○18 日（土）夏休み特別企画 **親子で木をつかって遊ぼう**
- ●26 日（日）館長講座 **第二回**
- ●5 日（日）古文書講座 **初級編②**
- ○9 日（木）夏休み特別企画 **ミニ灯籠を作ろう**
- ●12 日（日）古文書講座 **初級編③**
- ○23 日（木）夏休み特別企画 **弥生機でコースターを作ろう**
- ●11 日（土）講演会 **地域社会と出征兵士**
- ●14 日（火）収蔵品展関連事業 **戦争体験を聞く①**
- ●16 日（木）収蔵品展関連事業 **戦争体験を聞く②**

9 月

～2 日（日）

8 日（土）～ 24 日（月・祝）　**第 61 回埼玉県名刀展**

- ●1 日（土）大人体験教室 **友禅染め**
- ○15 日（土）親子参加編 **親子で香りを聞く－香道体験－**
- ○29 日（土）子ども体験教室 **和楽器体験－琴・三味線に挑戦－**
- ●2 日（日）古文書講座 **中級編①**
- ●9 日（日）古文書講座 **中級編②**
- ●16 日（日）古文書講座 **中級編③**
- ●27 日（木）野外博物館教室 **中世の城郭を歩く**

10 月

13 日（土）～　**川越とサツマイモ　－九里よりうまい十三里をめぐる物語－（仮題）**

- ●20 日（土）講演会 **展示資料解説**
- ●25 日（木）野外博物館教室 **サツマイモ関連史跡めぐり**
- ●28 日（日）講演会 **展示資料解説**

11 月

川越とサツマイモ　－九里よりうまい十三里をめぐる物語－（仮題）　～ 25 日（日）

- ●3 日（土・文化の日）民俗芸能実演 **「福田の獅子舞」**申込不要
- ○17 日（土）子ども体験教室 **花で遊ぼう－いけばな体験－**
- ●11 日（日）講演会 **川越とサツマイモ**
- ●25 日（日）館長講座 **第三回**

12 月

1 日（土）～ 9 日（日）　**博物館文化祭**

- ○8 日（土）子ども体験教室 **お正月飾りを作ろう**

平成 29 年度 利用状況　博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも、平成 29 年度中に、多くの皆様に御来館いただき、誠にありがとうございました。今後も、より多くの方に御満足いただけるよう、常設展示・企画展示の充実を図っていきたいと考えています。

皆様の御来館を心よりお待ちしています。

施設区分	29年度入館者数				1日平均入館者数	開館日数
	一般	大学生・高校生	中学生以下	合計		
博物館	50,468	3,190	35,905	89,563	306	293
川越城本丸御殿	120,609	7,065	28,561	156,235	524	298
川越市蔵造り資料館	64,671	2,539	7,675	74,885	985	76

※蔵造り資料館は、耐震化工事のため6月末まで一部を無料公開。

第２８回収蔵品展「戦中・戦後の川越の歩み」

会　期　平成３０年7月14日（土）～9月2日（日）

昭和期の戦中・戦後の時代を対象に、市民を始めとする多くの皆さまから頂いた資料から、戦時下における市民生活の苦労や、多くの人が亡くなった戦争について、その足跡を明らかにします。

昭和 20 年(1945)福原国民学校誌と 8 月 15 日部分

第 61 回埼玉県名刀展　日本刀－千年の歴史－

会　期　平成 30 年9月８日(土)～9月 24 日(月)

本展覧会は、埼玉県刀剣保存協議会との共催事業です。会員の愛蔵の刀剣・拵・小道具の展示を通じ、千年にわたる日本刀の歴史を振り返ります。博物館からは鎌倉時代の備前一文字派吉房の太刀などを特別出品いたします。また、展示に併せて、研ぎ・柄巻・刀身彫刻など刀職による実演も行いますので、ぜひご来館下さい。

利　用　の　御　案　内

◆入 館 料

区　分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券		
				・博物館 ・美術館	・博物館 ・本丸御殿 ・美術館	・博物館 ・本丸御殿 ・美術館 ・まつり会館
一　般	200円 (160円)	100円 (80円)	休館中	300円	370円	600円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	休館中	150円	180円	400円

※(　)内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆**開館時間**　午前９時から午後５時まで（ただし入館は午後４時 30 分まで）

◆**休 館 日**　月曜日（休日の場合は翌日の火曜日）
第４金曜日（休日を除く）年末年始（12 月 29 日～１月３日）
館内消毒（６月下旬）特別整理期間（12 月下旬）

＊開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿とも原則として同じ
（館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館）

＊**蔵造り資料館は、耐震化事業のため平成 29 年７月１日から平成 31 年３月末（予定）まで休館いたします。**

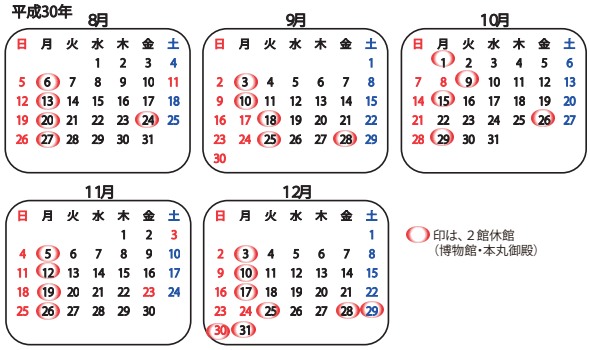
◆**交 通 案 内**

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より、
●東武バスにて　「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩 10 分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車すぐ
●イーグルバスにて　「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車すぐ
※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

◆**ガイド**　○博物館　平日（開館日）午前 11 時・午後２時　　土・日・祝日　午前 11 時・午後１時・午後２時・午後３時
※予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。
○川越城本丸御殿　毎月第２・第３日曜日　午前 11 時・午後２時　※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

◆**機織り実演・体験**（協力：博物館同好会）
○博物館　毎週火・水曜日　午後１時～３時　華の会（裂き織り）
毎週木・日曜日　午前 10 時～午後３時 (12 時～１時はお休み)　川越唐桟手織りの会
※予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は博物館までお問い合わせください。

平成30年



博物館の最新情報をパソコンヌは携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のＱＲコードから登録の手続きができます。毎月 25 日に最新の情報を配信します。
※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信等にかかる費用は利用者の負担となります。

発行日◆平成 30 年８月１日　　発行◆川越市立博物館

〒 350-0053　川越市郭町２丁目 30 番地１　　TEL 049-222-5399　　FAX 049-222-5396
Ｅメール　hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp　　ホームページ　http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/